



東和保育園のイチヨウタイル制作風景（本文中に関連記事があります）

目次 / contents

東日本大震災にて被災された皆様、ならびにご関係の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。被災された皆様の救済と、被災地の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

特集「安全で安心して暮らせるまちづくり」.....

- 東日本大震災が問いかけるもの～ワンパック専門家相談活動に参加して / 杉原五郎 ②
- 「災害」 / 三輪泰司 ④
- 成逸学区・上鳥羽学区まちづくり物語 / 石本幸良 ⑥

特集「子どもの空間」.....

- のぞみ保育園と東和保育園が竣工しました / 山崎博央 ⑧
- スノーピーク箕面自然館とスノーピーク箕面キャンプフィールドがオープンしました / 原田稔・和田裕介 ⑩
- だん王保育園の耐震補強工事が完成しました / 三浦健史 ⑫

ひと・まち・地域.....

- 京都市基本計画が策定されました / 松本明 ⑬
- 都市と農のよい関係～新たな都市計画を展望して / 岡本壮平 ⑭

きんきょう.....

- 1日でまちづくりの新しいきっかけができた「さんの夢・未来を描くワークショップ」 / 小阪昌裕 ⑯
- 事業所のごみ排出実態を調査しました / 武藤健司 ⑰
- 新人紹介 / 山崎衛 ⑱

メディア・ウォッチ.....

- 「現場発！産学官民連携の地域力」 / 中塚一 ⑲

まちかど.....

- 「ぶらり萩あるき」しませんか？ / 江藤慎介 ⑳

特集「安全で安心して暮らせるまちづくり」



東日本大震災の甚大な被害からの復興と復旧は、日本にとって大きな課題を突きつけられました。政府による復興への青写真の作成が急が

サルタントとしても何ができるのか、何をすべきか、深く問われています。

今号では、「安全で安心して暮らせるまちづくり」をテーマに特集を組みました。

東 日本大震災が問いかけるもの～ワンパック専門家相談活動に参加して

／代表取締役社長 杉原五郎

4月29日から5月4日までの6日間、東日本大震災の被災地である岩手県宮古市・大槌町・釜石市・陸前高田市、宮城県仙台市・名取市、福島県福島市・いわき市を訪ねました。阪神・淡路まちづくり支援機構（1996年9月創設）の附属研究会が主催した「ワンパック専門家相談隊」総勢37名の一員として参加しました。

東北は意外と近かった

29日の朝、伊丹空港発の飛行機に乗り、10時前に福島空港に着きました。空港でレンタカーを借りて、東北自動車道を一路最初の訪問地・岩手県宮古市に向かいました。大型連休初日ということもあって、須賀川ICに入った直後から渋滞に巻き込まれ、花巻PAに午後4時、宮古市への入り口に当たる遠野市に午後6時頃到着、ということになりました。

空と陸の高速交通体系を活用すると、〈東北は意外と近い〉という印象を持ちました。

大津波によって破壊されたまち

29日の夕方6時過ぎに宮古に向かい、車のヘッドライトで照らしながら、被災した宮古のまちを見て回りました。港の周辺一帯が大津波で大きな被害

を被っているのが実感できましたが、宮古駅近くの飲食店は平常営業しており、お客さんで満杯であったのに驚きました。

30日は、朝10時から釜石市教育センターで専門家相談活動を開始しました。「港の近くで住んでいたが、家を流された。土地を県か市に買い上げてもらって、別の家を購入したい。土地を売却できるか、新規に中古住宅を購入した時、被災者としての優遇措置が得られるか」という相談に、税理士さんと一緒に対応しました。

野田武則釜石市長は、「まちは存亡の危機にある」と強調されていました。新張総合政策課長から、3月11日の大地震直後の大津波への市の対応について、いろいろと聞き取りをしました。

自治体とまちの機能をまるごと失った大槌と陸前高田

釜石のすぐ北隣にある大槌町を車で見て回りました。テレビで、大槌町長が津波に流されたとの情報を得ていたのですが、大槌のまちをみて茫然自失になりました。第二次世界大戦の末期、東京・大阪・名古屋をはじめ日本の都市は大空襲で焼け野原を経験していますが、大津波で町役場を含めてまちが壊滅的に破壊され、がれきが一面に広がる光景は、言葉になりません。

翌日5月1日、陸前高田のまちに入り、専門家相



被災した釜石の中心商店街



津波の直撃を受けた陸前高田のホテル



原発・放射能問題の専門家相談風景
(福島県立あずま運動公園)



地震と津波の影響を受けた小名浜港親水公園
(福島県いわき市)



ワンバック専門家相談隊
(仙台空港の近く、宮城県名取市)

談活動を行う傍ら、被災したまちを歩いて視察しました。津波の被害をかるうじて免れた、少し高台にある高田小学校から海辺の方角に市街地を眺めると、破壊された消防署やホテルがぼつんと建っているものの、大槌と同様、まちは一面、無慈悲とも言える津波の暴力で破壊し尽くされていました。350年前から植樹されてきた陸前高田自慢の7万本の松林は、根こそぎ津波で流され、奇跡的に1本だけ残りました。

私たちは、伊藤明彦市議会副議長と1時間以上にわたってお話をする事ができましたが、伊藤さんは、ぼつりぼつりと被災直後の状況を具体的に説明して下さいました。

- 陸前高田は、震災前から高齢化と人口減少が続き、3.2万人ほどだった人口は2.4万人ほどに減少していたが、今回の震災でさらに1割を失った。
- 市役所の職員300人ほどのうち69人が亡くなり、不明をいれると120人(4割)ほどがいなくなった。
- 両親を亡くした児童・生徒は27人に及んでいる。
- 地元の消防団は6つの屯所があったが、そのうち5つが流された。消防団の中には、被災のショックで一人にしておけない団員もいる。
- 陸前高田の財政規模は一般会計で100億円、自主財源が25%ほどの弱体化した自治体だが、今回の震災で財政面でも決定的な打撃を受けた。

3つの支援機構が復興まちづくりで意見交換

5月2日、仙台弁護士会館で、3つの支援機構(宮城県災害復興支援士業連絡会、東京都災害復興まちづくり支援機構、阪神・淡路まちづくり支援機構)によるシンポジウムが開催されました。専門家相談活動と復興まちづくりのあり方をめぐって活発な意見交換がされました。参加者は、約60名ほどでした。

阪神・淡路まちづくり支援機構から、代表の塩崎賢明神戸大学教授をはじめ、研究者、弁護士、建築家、医師、土地家屋調査士の各メンバーは、阪神・淡路大震災後の復興まちづくりの経験を踏まえて、積極

的に発言しました。私は、①基礎自治体の再建、②住民とコミュニティの再建、③漁業、農業、商工業を含めた地域産業の再建、の3つが重要と問題提起しました。

最後に、「東日本大震災の復興支援 専門家共同アピール・仙台」を採択しました。

放射能の不安に直面する福島といわきの被災住民

今回の東日本大震災は、複合震災の様相を強く帯びています。とくに、福島原発問題(冷却水事故)は今も終息せず、放射能汚染の危機は払拭できていません。

5月3日に、福島市内にある避難所・あずま運動公園体育館、5月4日に、いわき市文化センターで、それぞれ相談活動を行いました。原発と放射能に係わる相談には、小野公二先生(京大原子炉実験所教授、専門：放射線医学)と水野義之先生(京都女子大学現代社会学部教授、専門：核物理)のお二人に対応していただきました。2つの会場でミニ講演もお願いし、一般市民にはなかなか理解しにくい問題を専門家の立場からわかりやすく説明していただきました。科学コミュニケーションとメディエーター(仲介者)の重要性を再認識しました。

私も何度かお話を聞いているうちに、シーベルト、低線量被爆などの専門用語も少し理解できるようになり、原発・放射能問題による風評被害に翻弄されている福島県の現状について認識を深め、今後について一定の科学的見通しを持つことができました。

東日本大震災が私たち日本人に問いかけるもの

このたびのマグニチュード9.0という未曾有の大震災と大津波、そして原発事故は、直接被災した東日本地域だけでなく、日本人の私たちひとり一人に重たい課題を突きつけています。私たちに何ができるか、何をしなければならないのか。

アルバックは、1967年に京都の吉田山麓で創業して以来、44年にわたって、地域とともに歩んできました。シンクタンク、都市計画・まちづくりの



コンサルタント、建築設計の専門家として、地域課題の解決に努力してきました。これからも、地域社会に「希望の火」を灯し続けていきたいと考えています。今回の大地震という試練を乗り越えて、より一層たくましく成長していきたいと思います。

「災害」／取締役相談役 三輪泰司

大災害1ヶ月で、多くの公共施設や学校等は元に戻しましたが、京都府庁は「半旗」掲揚を続けています。関西広域連合で、京都府は滋賀県とともに福島県担当と決まっています。下写真は、まだ苦難の日々が続く福島県民の皆さんと、気持ちを共にしていますというしるしです。

身近の備え・点検

衝撃の感覚は距離とともに、時間とともに減衰し、局面は刻々と変わって行きます。津波災害のすさまじい光景と、目に見えない放射性物質の挙動に、日本中がところを暗雲で覆われているような気持ちです。がんばれの声を掛けるのですが、まだ来るのではという不安の暗雲がたれこめています。

さらにうっとうしい暗雲は、この国はほんとうに“安全”を総点検し、“安心”へ大転換するのか、ほんとうの創生へ向えるのか、まだ払拭しきれていない「不信」という暗雲でしょう。

暗雲を除くのは自分自身の身近から。まず、我が家の備え点検。一昨年4月、一番家に居る時間の長い



京都府庁の半旗：4月19日

細君の安全と快適を実行しようと、耐震補強を兼ねて居間・台所を改修していました。

次に“意識”の備え。「ロータリーの友」昨年12月号に「備えあれば、患えなし」と題する

香川県防災局の乃田防災指導監の簡潔で判り易い講演記録がありました。家族一緒に読んで心構えの点検。

次は、少し広げて、周りの“まち”に目を向けてみました。

防災・福祉コミュニティ

阪神・淡路大震災の時の神戸市消防局長・上川庄二郎さんから、あの時の迫真の、そして痛恨の記録と、そこからの教訓・提言を頂いていました。

神戸では誰が助けたか。近所の人と家族9.4%。消火活動したのは誰か。近所の人と家族59.1%、消防隊18.3%。上川さんが提言されているように、常備消防力の強化は当然ですが、市民一人一人が力を合わせ、互いに助け合う「防災・福祉のまちづくり」が基礎です。

まちの備え・点検

そこで、次にできることは、自分のコミュニティの“まちづくり”として実行すること。

昨年11月に、桃山南学区の社会福祉協議会・自治連合会の講座で地元のまちづくりをお話ししました。大震災後すぐに、今度は、地域女性会から、呼ばれました。少し先になりますが、6月に桃山南小学校でお話することになりました。

京都は内陸都市ですから津波に襲われることはありませんが、地震は幾度も経験しています。

京都市は、伏見区の端、我が桃山南学区で、東南海・南海地震と、宇治川断層の活動による被害予測をしています。いずれも震度6強。

我が学区域は廻りを川に囲まれています。液状化危険度は高いとなっています。

当然、水害が一番の問題。現に、1965年（昭和40）9月の台風で、宇治川・山科川が氾濫して陸の孤島になってしまいました。その後、排水施設が7ヶ所も作られ、浸水はなくなりました。そうすると、町内会は備えていたボートをやめ、水防団もなくなりました。

地域の防災力は、強くなったのか、弱くなったのか、考えさせられますね。

まちづくりは手間が掛る

本誌149号(2008年5月)に「堤防がすっきりした」と題してご報告していました「山科川・丹後橋周辺整備」は、この3月末、やっと右岸の一部で仮柵をはずし、車イスも通れるバリアフリー・ゲートの工事が終わりました。始まりから5年掛って、安全・安心は一歩進みました。しかし、左岸はUR 桃山団地の再整備とからむので、何時のことになるか判りません。まちづくりがカタチを成すには、とても時間が掛かります。

本誌今号と146号(2007年11月)に石本幸良君が、成逸学区マンション居住者の町内会加入「せいいつ方式」を紹介しています。152号(2008年11月)では山崎裕行君が、この成逸学区での、夜間防災訓練・避難所運営マニュアルを紹介しています。「防災まちづくり」の住民自治は着実に進んでいると言えますが、まだまだ少数派です。

こんにち、どなたも「地域力」とか「地域主権」とか言われます。国も地方公共団体も、地元の「合意」なしには何もできません。でも逆に地元も地方と国の公務員との協働なしには、何もできないのです。

さらに地域自治から市町・府県・国へと「補完性原理 Principle of Subsidiarity」による「住民主体のまちづくり」を展望し、組み上げていくには、まず住民自身の統治力を高める、そのための学習・修練を積む、そのためには公務員と専門家がタッグマッチを組んで支援する、ということになるのですが、それは時間と根気の仕事です。

その方向を指し示す「防災・福祉のまちづくり」こそが大きな犠牲に報いる理念でしょう。

長期・広域の備え・総点検

年初から、ぼつぼつと自分の仕事の総点検を進めていました。「21世紀の設計」に始まり「海洋スペース利用計画手法研究」、「近畿日本会地域の計画」そして「関西学研都市構想」と進んできました。

「関西学術研究都市についての第2次提言」(1979年7月)で、関西に設置されることが適切である理由の④に、「長期的展望のもとにおける学術研究は、

いわゆるセキュリティの視点からも、行政の中心から一定の距離をもった地方において行われることが望ましい」と書いています。(p-2)

奥田東先生と、この構想の目的は、ナショナル・セキュリティにある。研究機能・情報中枢はバックアップを用意しておくべきであると話し合っていました。筑波とは20年のタイムラグを置く研究機能、西日本・アジアへのサービスを担う国会図書館分館、政府機能の代替へ転換可能な、建設・農林水産などの資料館といった方策です。

2002年(平成14)10月、開館した国立国会図書館関西館は、設置目的にアジアへのサービスが謳われています。

昨年3月、「私の仕事館」は無駄だということで閉館になりました。「事業仕分け」で科学技術振興調整費が削減と判断されました。活断層や地震考古学、再生可能エネルギー、超伝導、核融合やトリウム溶融塩原子炉研究など、今日明日の役に立たない研究は無駄でしょうか。

内なる安全保障、次世代の文明に関わるでしょう。このことはアルパックも含めて企業経営にも言えることでしょう。

桜は見事に咲いて

2月27日の日曜日、吉田山で桜の植樹を奉仕しました。京都東ロータリークラブが音頭をとって地元の人達、ボーイスカウトの子ども達と、苗木20本を植え、汗を流しました。来春が楽しみです。京大土木・建築の学生は、吉田山で測量実習をしていましたので、私にとっては、一種のふるさと回帰でした。

大震災から8日後。3月19日(土)、西陣まちづくり協議会と京都市埋蔵文化財研究所は史跡ウォーク「ぐるり聚楽第」を行いました。5班・100名でした。地域のことを知ることが、防災・安全の基礎だということがよく判りました。

大震災から11日後。3月22日から4月3日まで、京都府庁旧本館春の一般公開。東京では上野公園のお花見も自粛したそうですが、開催を決定しました。

はじめは少し寒くて、桜の開花が遅れ、来場者が



京都府庁旧本館：中庭の枝垂桜

「あじさいコーラス」は、参加者と一緒に「故郷」を唱ってフィナーレとなりました。

少なかったですが、おわりは、昨年と同じ1日1,500人を超える盛況でした。被災地への義援金を沢山お寄せ頂き感激しました。

中庭の枝垂れ桜は満開、容保桜は3分咲き、こころ洗われました。正庁での女性府職員

の「あじさいコーラス」は、参加者と一緒に「故郷」を唱ってフィナーレとなりました。

「成逸住民福祉協議会」が主体となってさまざまな地域活動を行っています。この「住民福祉協議会」は上京区にしか見られない組織形態で、学区のすべての各種団体と町内会が参加しています。

近年、学区内で共同住宅の増加による町内会加入率の減少傾向が顕著となっており、平成19年10月に新築マンション居住者のマンションが位置する町内会への加入をルール化した「せいいつ方式」を策定しました。ワンルームマンション居住者は日常的な町内会活動への参加は難しい面もあるため、「準会員」という考え方を導入しました。準会員は、総会における議決権や役員への被選挙権、選挙権はありませんが、町内役員等の役割分担の必要はなく、市民新聞等や協議会の行事の情報提供を受け、その行事に参加することができます。

「せいいつ方式」の検討段階では「町内会の役割やメリット」についての質問が多く寄せられました。そこで、マンション居住者と戸建て居住者の交流を通して、ご近所同士が顔見知りになることを目的に「せいいつ住まい交流会」を企画しました。平成20年6月の第1回交流会から平成22年12月までに7回開催しました。

町内会加入促進に向けた「せいいつ方式」および交流会の継続的な取組の成果として、平成20年度に796世帯まで減少した学区の町内会加入世帯数が

成逸学区・上鳥羽学区まちづくり物語

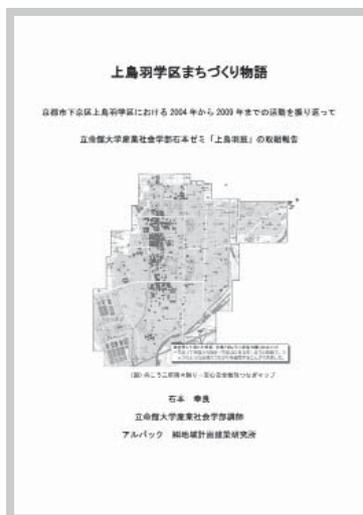
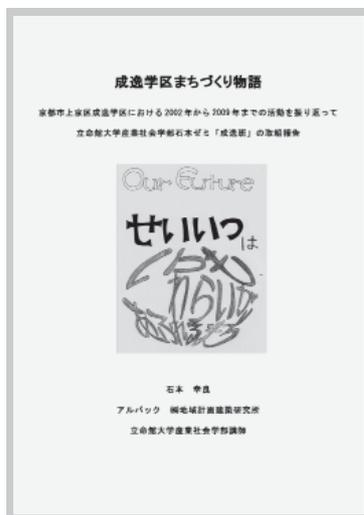
／京都事務所 石本幸良

2002年度から立命館大学産業社会学部で開講した石本ゼミは2010年度をもちまして閉講しました。9年間のゼミ活動で125名の学生がゼミを巣立ちました。ゼミは、まちづくりの現場を私と一緒に体験し、実践を学び、多くの住民の方とコミュニケーションについて学ぶ形式で進めました。ゼミでは京都市内の多くのまちづくり活動に参加しましたが、その中で長期にわたって活動を行った成逸学区、上鳥羽学区について、活動内容を「まちづくり物語」としてまとめましたので、報告します。

成逸学区まちづくり物語

成逸学区は上京区の北西部、西陣に位置します。明治2年に成逸小学校が開校し、その通学区が成逸学区となりました。児童減少のため、成逸・西陣・桃菌・聚楽の4学区が統合して西陣中央小学校となり、成逸小学校は平成9年に閉校しました。

成逸学区では昭和48年に組織された



増加に転じ、平成 21 年度には 842 世帯になり、平成 22 年度には 882 世帯が想定されています。

平成 20 年度には成逸自主防災会と協働で「成逸学区避難所運営マニュアル」を策定しました。避難所運営委員会の各活動班の役割を協議会の各種団体に割り振り、平成 21 年度の防災訓練では各種団体等において活動班のシミュレーションを行い、マニュアルの精査を行いました。今回の東日本大震災に遭遇し、日常からの取組の必要性を再認識し、マニュアルをもとに体験学習を継続します。

上鳥羽学区まちづくり物語

上鳥羽学区は南区の鴨川と桂川に挟まれ、国道 1 号など南北東西の幹線道路が集中し、事業所や工場なども多く立地する面積の広い学区です。町内会加入率は低下傾向で、マンションや学区内で建設の盛んな建売住宅にお住まいの方の加入率が低いことが要因です。

平成 17 年 2 月に、南区と京都市景観・まちづくりセンター主催で「地域まちづくりセミナー」が企画され、そのコーディネーターを依頼され、「地域における安心・安全」をテーマに、「安心して暮らせる上鳥羽のまちづくり」と題してワークショップを開催しました。このワークショップを契機として、平成 17 年度以降、自治連合会を中心に多くの団体等と大学のゼミ、京都市との協働による「安心安全のまちづくり活動」がスタートしました。

平成 17 年 7 月に「向こう三軒両々隣り－安心安全の数珠つなぎマップ作成」の提案を行いました。この取組は地域全体が子どもたちや高齢者を暖かく見守り、支えあう地域づくりを目指し、お互いの目と声かけでつなぐ、「まちの安心・安全のつながり」の度合いをビジュアルに示し、取組状況の確認することを目的に実施しました。

平成 18 年 4 月に自治連合会と各種団体、PTA、小学校などが集まって、「あんしん・あんぜん上鳥羽推進委員会」を設立し、数多くの取組を企画し、毎年継続して実施しています。

○上鳥羽あんしん・あんぜんパレード（4 月）

○竹プランターづくり（春と秋）

○七夕の夕べ（7 月上旬）

○夏の納涼フェスティバル「夏の夜市」（8 月）

委員会では、今一度ご近所づきあいを見直し、小さな目くばり・心くばりを復活することで、まちの安心安全力を再生するため、平成 18 年度まちづくり目標を「小さなおせっかいがこちよいまちづくり」と設定しました。委員会を中心とする「小さなおせっかい」の運動が 3 年目を迎え、平成 21 年 2 月 21 日に「上鳥羽－小さなおせっかい宣言」を行い、「小さなおせっかいに包まれた、温かい、こちよいまちづくり」を広く発信しました。

また、「小さなおせっかい寸劇」や「小さなおせっかい賞」の創設など、「小さなおせっかい」をテーマに多くの活動を企画しました。さらに、「小さなおせっかい」を子どもたちがいつでも口ずさむことができるようにと、「小さなおせっかい」ソングを作り、平成 22 年 7 月の七夕の夕べで発表しました。このように上鳥羽では、小さなおせっかい運動が、ゆるやかですが、定着化しています。

私のゼミ終了により、大学の講師の立場での 2 つの学区との関係も同時に終了となりますが、これまでの活動の経緯と経験を活かして、今後ともまちづくりプランナーとして、まちづくり活動を支援していきたいと思います。

以上が 2 つの学区のまちづくり物語にまとめた概要です。2 つの物語につきましてはアルパックの HP にファイルがありますのでご覧頂ければ幸いです。

最後に私事ですが、昨年の 11 月に体の変調から、11 月 15 日に入院、今年の 1 月 5 日に退院、その後自宅療養で、ようやく 2 月中旬に会社に復帰し、現在に至っています。原因は今も不明で難病認定を受けています。この間、関係者のみなさんにご迷惑をおかけし、ご心配頂きましたことに深く感謝いたします。

「成逸学区・上鳥羽学区まちづくり物語」

URL : http://www.arpak.co.jp/nl/167/167_3.html



アルパックは創業当初から、幼児施設の計画や設計に携わってきました。その施設数は、優に100を越えます。地域や子どもの目線にたって、取り組んできたその姿勢や経験は、今日、幼児施設だけでな

く他の施設にも活かされています。今号では、アルパックがお手伝いした、今春竣工の保育園などをご紹介します。

のぞみ保育園と東和保育園が竣工しました ／京都事務所 山崎博央

国では、昨今の保育所待機児童解消を目指すべく平成20年度に「安心こども基金」が創設されました。平成22年度までの時限付となっており、この3カ年はこの基金を財源とした保育園の建て替えや増築、改修が、特に共働きニーズの高い都市部を中心に多くみられました。

京都市は全国的にみても古くから民間保育園の割合が圧倒的に多い都市で、老朽化に悩んでいる保育園もあります。そのため、この間、保育所待機児童解消と老朽建物改築事業として、いくつかの保育園の建て替えや改修が行われました。そのうちアルパックでお手伝いをさせていただいた園についてご紹介します。

のぞみ保育園

地下鉄北大路駅から歩いて1分、小さな教会の庭で子どもたちの遊ぶ声が聞こえてきます。その教会のおとなりに教会と雰囲気がよく似た建物があります。

のぞみ保育園は昭和45年、社会福祉法人うるうてのホームによって定員60名で設立されました。平成21年、現在の園長であり、かつ教会の牧師でもある高塚先生が新しく「社会福祉法人京都ルーテル会」を設立され、0歳～就学前までの子どもを預かる保育園として現在運営されています。



のぞみ保育園：外観

この、のぞみ保育園の園舎、実は40年前もアルパックが設計したもので、OBもお子さんを預けていたり、いろんなご縁があって、今回もお手伝いさせていただくことになりました。平成21、22年度の2カ年にまたがって、仮設園舎建設、仮移転、旧園舎解体、新園舎建設、園庭整備、と延べ14ヶ月間かけて3月末に引渡しを行いました。

三角形の変形敷地は、都心の保育園の宿命といった狭さで、かつ隣接する住宅と交通量の多い道路に挟まれており、なかなか条件の厳しい敷地でした。園舎の計画に当たっては、園長、主任の先生以下職員の皆さんと意見交換を行いました。狭い敷地を無駄なく有効に使える形を考えていこう、ということで、敷地にそった三角形の形状とし、各辺3つのブロックに分けたプランとしました。階段を中心とし、その周りに廊下を兼ねた少し広めの共用スペースを設け、部屋以外の「逃げ」のスペースを作り出しました。

また、これまで独立してとれなかったホールを3階に設け、音楽の練習や屋内運動、発表会なども保育室とは別の空間でできるようになりました。その他給食室や事務室、職員休憩室などもこれまでより充実させ、全体的には旧園舎より一回り大きな建物になりました。

隣接地にあるW. M. ヴォーリズ設計のルーテル賀茂川教会は、地域のシンボリック的存在でもあり、今回の保育所新園舎は教会と調和したデザインが施主からも地域からも要望されました。そのため、今回は保育園と教会の一体感がわかりやすいように、できるだけ教会のデザイン要素を取り入れた設計としました。

あと少しで庭の桜が満開になりそうな4月の日、のぞみ保育園の入園式が行われました。今年からは定員が30名増えて90名の園児たちが、この新しい園舎で過ごし、学び、育っていきます。



のぞみ保育園：ホール



東和保育園：乳児専用園庭

東和保育園

地下鉄十条駅から徒歩2分、こちらも駅近の保育園です。

東和保育園は昭和27年に開園された、0歳～就学前までの子ども60名を預かる園です。木造平屋の旧園舎からは50年以上にわたってたくさんの子どもたちが卒園されています。今回の園舎建て替えにより定員が60名から90名に増えました。

園長の子どもたちに願う思いは、「『自己肯定感』の持てる子どもに育てほしい」というもの。「自分に自信を持てるような子どもになってほしい、そのために子どもの目線で話を聞くことを大切にし、『手渡す』ように言葉を与え、ひとりひとりの子どもにより添った保育を行っていく」ということが基本姿勢です。

また、これまで4・5歳児で取り組んでいた異年齢保育を3～5歳児に幅を広げて行うことになりました。互いに認め合いながらおりあいをつけられる力を身に付け、社会に適応できる子どもに育てていきたい、という思いがあります。

そういったお話から、新しい保育園は「落ち着いた雰囲気」のある園舎がいい、ということになりました。

毎週、夜遅くまで保育士さんも一緒になって議論をしました。これからの保育をどうしていくか、新しい形（3～5歳児の異年齢保育への取り組み）のためにどのような環境が良いのか、3階建てになることで日々の動きがどう変わるのか、など。熱心な園長との議論は、時には深夜におよぶこともありました。

繰り返す打合せの中で譲れなかったことが3点。1つは、ホール（遊戯室）を幼児の保育室とは別に、かつ同一フロアに確保すること。管理動線の面もありますが、子どもの移動に上下の動きを極力持ち込まないようにして、シンプルな動線とするため。2つめは、とにかく静かになれる空間構成、建物性能にしたいということ。幼児と生活リズムが

異なる乳児一特に0、1歳児の空間に、幼児の保育で発生する音（お歌や運動、おしゃべりなど）を持ち込まないため。3つめは、園庭を充実させること。広さはもとの庭より狭くなりますが、子どもたちが楽しく遊べる園庭にしたい。さらに乳児が安心して遊ぶことのできる乳児専用のお庭を設けたい、ということです。

この3つを柱に何度もプランの検討を重ねました。

現場に入っても園長の熱意はとどまることを知らず、とにかくギリギリまで考えに考え抜いて決断をされていました。子育てをしながら、今後の保育方針や運営についても考え、そして建て替えのことに取り組む、という「まさに寝る暇がない」状態だったに違いありません。敬服いたします。

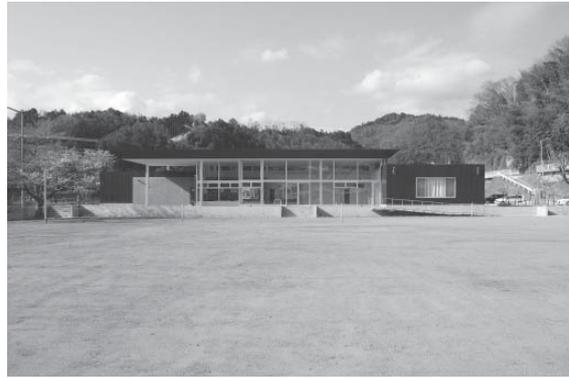
この園を建て替えるにあたって、一番悩んだことは、園庭にそびえる大きなイチヨウの樹をどうするか、ということ。仮設園舎をつくらずに現地で建て替えようとする、どうしても既存園庭に建てる必要があります。でもイチヨウを残すとなくなると思い描く保育のための空間づくりが難しくなってしまう。悩んだ結果、イチヨウはやむを得ず伐ることになりました。園舎の壁には、この樹をずっと忘れないように、園児が書いた大きなイチヨウの絵を飾っています。これからもずっとみんなを見守ってくれますように、と願いを込めて。



東和保育園：外観



ひと・まち・地域



スノーピーク箕面自然館外観

スノーピーク箕面自然館とスノーピーク箕面 キャンプフィールドがオープンしました

／大阪事務所 原田稔・和田裕介

箕面でアウトドア

止々呂美地域は箕面市の中でも豊能町と隣接する北部地域に位置します。周囲は緑豊かな山並みに囲まれ、一級河川余野川に沿って、入母屋瓦屋根の伝統的な家屋と農地によるのどかな風景が広がります。

一方、大阪北部の要として、この止々呂美地域のまわりでは幾つもの大規模公共事業が展開されています。

平成19年には新規のニュータウンである「箕面森町」がまちびらきし、箕面山麓をトンネルで貫いた「箕面グリーンロード」が開通しました。これにより、止々呂美地域は大阪梅田から新御堂筋で直結し、千里中央からは車により15分でアクセスできるようになりました。

また、新名神自動車道（平成30年開通予定）の建設も始まっています。

アルパックで構想のお手伝いから設計監理までを行い、この度完成した「スノーピーク箕面自然館」「スノーピーク箕面キャンプフィールド」は、実はこれら大規模公共事業と密接に関係します。

自然館は、箕面森町に小中一貫校「とどろみの森

学園」（アルパック設計監理）が開校したことに伴い、地域の学校が統廃合され、廃校となり、学校に代わる集落コミュニティの中心として計画された施設です。

また、キャンプフィールドは、箕面森町と一体的整備を行う予定だった余野川ダムの事業凍結により、その広大な用地の活用策として計画された施設です。

両施設とも、地域活性化や地域交流に加えて、地域資源である豊かな自然活用や体験、すなわち「アウトドア」をキーワードとします。

指定管理者スノーピーク

この自然活用・体験を目的とした両施設の管理は、施設名称からも伺えるように、有名アウトドアブランドである「スノーピーク」がプロポーザルにより指定管理者として選定されています。

株式会社スノーピークは新潟の三条市に本社を構えるアウトドアプロダクツの製造販売を手がける企業で、その製品やキャンプイベントは全国的に熱烈なファンに支持されています。

このアウトドアを熟知した企業が、地域のまちづくりとコラボレーションし、アウトドアフィールドをプロデュースしていく…、非常に魅力的な構図が描かれます。



農産物等展示コーナー・郷土資料コーナー



講習館外観



炊事棟外観



キャンプフィールド

スノーピーク箕面自然館（箕面市立止々呂美ふるさと自然館）

自然館は自然に関わる様々な体験について、キャンプを中心とするアウトドアという切り口でサービスを提供する施設です。テント設営講習などキャンプ初心者へのサポートや、アウトドアプロダクツの展示、キャンプフィールドの受付やレンタル品の窓口を行います。また、止々呂美地域の地域製品の加工や展示直売も行い、止々呂美の豊かな自然を体感するスタートの場所になります。

自然館は前述の通り、昔の学校敷地を活用しています。自然館は新築の本館と、昔の体育館を活用した講習館、芝生化が施された（原稿執筆段階では播種が終わったところでもまだ発芽はしていませんが…）校庭で構成されます。校庭では、デイキャンプや初心者向けのキャンプサイトとして利用される予定で、隣接して炊事棟が設けられます。

さて、自然館本館の設計の特徴について紹介します。

建物は地域製品の展示販売や郷土資料の紹介を行うホールを中心とし、北側と東側に加工室や体験学習室など個別の機能が配置されます。

ホールは誰でも気軽に訪れることができるように天井を高くし、開放的な空間を形づくりします。一方、周囲に配置される個別機能は天井を低く抑え、地域住民の活動をしっかり支えるイメージをもたせるため、外壁仕上げ材に木を用いた基壇のイメージとしています。

ホールを覆う大屋根は、外部のテラスまで延長され、内外が一体的に機能できるよう意図しました。

また、低層部と大屋根の間にガラスの開口部を設け、大屋根が宙に浮いた軽やかなイメージをもたせています。これは、空調を行わない春や秋における自然の風の流れを生み出すと共に、ホール北側や東側に柔らかい自然光を落とします。

スノーピーク箕面キャンプフィールド（箕面市立止々呂美ふるさと自然館野外活動緑地）

キャンプフィールドはキャンプを通して箕面の豊かな自然を体感、体験する施設です。谷間を流れる

川に沿った棚田の地形を活かして整備されたキャンプサイトを中心に、キャンプフィールド周辺は自然林が多く残っていて春の新緑のシーズンから秋の紅葉まで、色とりどりの豊かな山の四季を体験することができます。

キャンプサイトはオートキャンプを中心とした90区画を整備、うち20区画には電源コンセントも設けました。建物としては炊事場、トイレ、シャワー室を併設した管理棟と他2棟の炊事棟（トイレ併設）を整備しました。また、管理指定者がキャンプメーカーということで、現地に常駐されるスタッフの方から、初心者から上級者までニーズに合わせたキャンプに関してのアドバイスを受けることができます。

できたて、ほやほやのキャンプフィールドなので、今は未だ緑も少なく人の手で造られた感が残りますが、これから年を重ねるごとにまわりの自然と一体化した、良いキャンプフィールドになっていくことと思います。

オープニングとこれから

平成23年4月2日、自然館で両施設のオープニングセレモニーが開催されました。市長や来賓の挨拶やテープカットに加え、アウトドア施設ならではのことで、地面にペグ（テントなどを張るロープを地面に固定するための杭）が打ち込まれました。当日は自然館で地域の新鮮野菜や特産品の直売会が行われたりと、多くの人で賑わいました。

また、15日からはキャンプフィールドもオープンし、その週末の予約は約90組と、多くのキャンパーが訪れています。

両施設とも軌道に乗り出すのはまだまだこれからだと思いますが、都市と直結する新しい北大阪のアウトドアスポットとして期待されます。

スノーピーク箕面自然館・スノーピーク箕面キャンプフィールド

URL:<http://www.snowpeak.co.jp/camp/minoh/>



だん王保育園の耐震補強工事が完成しました ／京都事務所 三浦健史

3.11の東日本大震災について触れざるを得ません。改めて地震の恐ろしさを感じるとともに、耐震補強の必要性を痛感します。だん王保育園（以下、だん王。京都市左京区）は、京都市内の民間保育園としてはいち早く耐震補強を行いました。

だん王とアルパックは、相談役の三輪が、今は乳児保育室と児童館として使われている児童センターを設計監理した昭和41年からのお付き合いです。

だん王は日本で最初の夜間保育園として、京都のみならず日本の保育を引っ張ってきたと言っても過言ではありません。壇王法林寺の前住職の故信ヶ原良文先生が戦後すぐの混乱の中、庫裏で保育を始められたとのこと。初期の苦労はお聞きするとさぞやと思わされることばかりです。昭和42年に前述の児童センター、昭和46年に園舎が竣工しました。ちなみに三輪は、園長の信ヶ原千恵子先生の高校の1年後輩、私事ながら私の妻もだん王出身ということで、縁も深い保育園です。

園舎の特徴は挙げればきりがありませんが、工事に関係する箇所では、南面する園庭側に雁行して巾2mの縁側のようなテラスを設け、そのテラスに沿って1、2階に保育室が3部屋ずつあること、保育室は南側に掃出し窓、北の道路側にも窓がある2面採光となっていること、1階のお寺との接続部分にホールとは別に多目的使用が可能な36畳の広間を設けていること、などです。

一昨年京都市から保育園の耐震診断助成補助金を受け、診断を行ったところ、コンクリートの強度は十分あるもののテラス側に大きな開口を取っている

ことや建設時の基準上耐震壁が少ないために、補強が必要という結果になりました。早急に補強したいという園のご意向もあり、昨年耐震補強の補助金を受け、工事を行いました。

補強設計は保育をよく観察し、比較的支障の少ない箇所に設けました。工事の内容は、保育室の北側の窓際に鉄骨ブレースを設置、保育室間の木製間仕切り壁を撤去しRC耐震壁を設置、広間部分にRC耐震壁を設置などです。保育しながらの工事なので、4工区に分け部分ごとに工事を行い、ほぼ1年かかりました。その間ホールを仮保育室としたり、引越しが多かったりと園児さん、先生方には大変なご苦勞をおかけしましたが、施工者も気を配ってくれ、無事今春完成しました。

だん王は園長が日本一といわれるくらい園児の作品制作に力を入れていますが、鉄骨のブレースを茶色に塗装して木に見立てツタを巻き付けられました。子どもたちにとってとても親しみやすくなったと思います。

保育園の耐震補強には計画しいろいろな課題が考えられます。だん王では出入口ではない北側窓に鉄骨ブレースを設置できましたが、保育や動線上ブレースやRC耐震壁を必要な場所に設けられないケースもあるかもしれません。また排煙や採光などの建築基準法上の規制が保育室にはかかるため、これをクリアするのが難しいことも考えられます。

京都市内には新耐震基準（昭和56年）より前に建てられた民間保育園が数多くあります。前述のような物理的制約や工事資金など多くの課題があると思いますが、今後できるだけ早く保育園の耐震化が進むことを願っています。



園庭側外観



補強の鉄骨ブレース



ツタが巻き付けられたブレース

京都市基本計画が策定されました

京都市務所／松本 明

市民公募で「はばたけ未来へ！京（みやこ）プラン」と名付けられた京都市基本計画が策定されました。平成11年に議決された京都市基本構想に基づく第2期の基本計画（計画期間10年間）と位置づけられます。

当社では、平成20年度から3か年、基礎調査から計画策定までのお手伝いをしました。

策定プロセス

策定に向けた市長の方針「徹底した市民参加」に基づいて、京都市ならではの取り組みが行われました。計画そのものの内容は京都市のホームページでぜひご覧いただくとして、ここでは、策定プロセスのトピックスをかいつまんでご紹介します。

京都の未来創造研究会

平成21年9月の審議会発足に先立つ約1年間、同志社大学新川達郎教授を座長に新進気鋭の若手研究者による12名の委員が、様々な議論を重ねて、今日的な基本計画の在り方を検討しました。地方分権改革の進展、大きな赤字を抱える地下鉄経営などの厳しい財政状況等の中での基本計画の「かたち」として、市民、企業、行政など多様な主体による「共汗型計画」、京都ならではの先進的で独創的な政策展開の基盤となる「京都の未来像」、行政分野を横断し、市民目線によるわかりやすさを重視した「融合による重点戦略」、市職員による使いやすさを重視した政策分野別の政策方針等が打ち出されました。

また、研究会と市職員との協働も特徴的でした。市職員から公募された次期京都市基本計画策定支援チームのメンバー15名が研究会委員と一緒に市役所の外に飛び出し、ヒアリングなど実際に足を使っ



た調査をしながら、①若者世代に焦点を当てたライフスタイル、②共助を重視した京都流コミュニティ、③生活・産業・観光・交通等を横断する環境政策＝「京スタイル」、④都市活性化に向けイノベーションを重視する創造都市戦略など、基本計画の重点戦略の素描となる4つのアイデアを形にしていきました。そして、若手職員の問題意識を研究者にぶつけながら、「政策」への昇華のプロセスを体験できたことも大きな成果だったと思います。

審議会でのワークショップ

70名という大きな審議会で、実質的な議論をどのように深めるかも大きな命題でした。主に未来像と重点戦略を検討する「融合委員会」と、政策の体系を検討する4つの分野別の「部会」が設けられましたが、議論積み上げ型の運営をするために、ワークショップ手法等を取り入れました。融合委員会では、それまでの研究成果や客観データをパネルやスクリーンで示しながら、未来像と重点戦略の芽を数多く生み出し、縦横にクロスさせ、輪郭を描いていきました。

U35

審議会と並行した取り組みとして、京都の「未来の担い手・若者会議U35」の活動があげられます。京都の様々な分野で活躍する概ね35歳未満の若者で構成される組織で、基本計画への政策提案や、各種市民参加事業のサポートを行うものです。

メンバーの熱意とアイデアと協働への意志を原動力として、基本計画が掲げる5つの未来像の一つに取り入れられた「真のワーク・ライフ・バランス」の提起、「どうすんねん京都!? 次期基本計画シンポジウム」と「京都の未来を考える 食べ物会議～自分が動けば未来が動く～」の2つのシンポジウムの実施、市民の中に飛び出す「出前パブコメ」の実施等々、アクティブでフレッシュな取り組みを展開しました。

この取り組みは策定後の平成23年度も続きます。U35の取り組みの詳細は、そのサポートで一緒に汗を流した当社の担当スタッフが改めてレポートします。



ひと・まち・地域

都市と農のよい関係 新たな都市計画を展望して

大阪事務所／岡本 壮平

はじめに

都市とその近郊、特に市街化区域とその周辺では、計画的でない農地転用、スプロール開発、耕作放棄地、農作業への苦情など…、都市と農のあまり「よくない関係」を見聞きします。ここでは、農側と都市側の両方の業務を通じて、都市と農のよい関係づくりについて私見を述べます。

京都府精華町…（都市と農の近居タイプ）

精華町は、京都府の南西端に位置し、関西文化学術研究都市の一角を占める人口約3.7万人のまちです。都市計画では、既成市街地と学研都市のニュータウンが市街化区域に区分され、市街化調整区域は基本的に農業振興地域として、都市近郊農業が振興されています。いわば「都市と農が近居」するまちです。

＜都市と農村のはざまで生き抜く農業＞

ニュータウンでは計画的な都市づくりが進められていますが、その周辺の集落等では都市化のあおりを受け、いわゆる農振白地農地を中心に、年平均10件、4,600㎡の農地転用が生じています。農地の減少と専業農家の減少が進み、現在では兼業農家が大半を占め、農家の後継者不足が深刻化しています。



農業振興地域には美田が広がる（精華町）

精華町農業は水稲栽培が主ですが、都市近郊という地の利を生かして、青とうがらし、水菜、花卉、えびいもなどの施設栽培が盛んです。また、減農薬有機米の栽培や観光いちご園も推進しており、特にいちごは府内最大の産地として都市住民を広く集めています。

＜精華農業の生きる道＝農業ビジョン＞

精華町の農業振興地域整備計画をお手伝いする中で、都市と農がよりよい関係で近居できるよう、「精華町農業ビジョン」の策定を提案しています。ここでは、「農業・農地の有する経済、健康、環境という価値を高め、それらの好循環を産み出して精華町のまちとしての価値を高めること」をテーマに、都市と農が共生する新しい都市近郊農業の推進をねらいとしています。具体的には、地産地消を推進するための「精華産表示」、「学校給食ファーム」、「精華の名物づくり」などのプロジェクトを設定しています。そして全ての基盤となる「担い手育成」や「農業ビジョン推進会議」の取り組みを提案しています。

＜新旧の壁を乗り越える農の力＞

空間的には都市と農が近居していますが、都市住民と農家の交流やつながりは少ないのが実態ではないでしょうか。旧来からの町に大規模ニュータウンが後からやってきた市や町ではいわゆる「新旧の壁」が共通の悩みになっています。実は近くて遠い都市と農村を結びつける…そのためには、都市と農が出合い交流する場や機会が必要です。そこで、精華町では、農産物直売や学校給食、ブランド化、農業体験など、農側からのアプローチが始まっています。都市計画・まちづくりの側でもこれを受け止めて連携する仕掛けが求められます。



都市近郊の農地
背後の高台がニュータウン(精華町)



直売所「愛菜館」
京野菜に力を入れている(精華町)



農と共存するライフスタイルが
可能となる住宅地(播磨地域)

兵庫県播磨地域…(都市と農の同居タイプ)

次に、兵庫県播磨地域における市街化区域内農地のあり方調査を例に、市街化区域内農地や都市型営農について考えてみます。いうならば「都市と農の同居」でしょうか。

<市街化区域内農地の状況と問題>

市街化区域は「優先的に市街化を図るべき区域」であり、生産緑地地区を除いて市街化区域内農地は「いつかは宅地化される仮の姿」として存在しています。しかし、新都市計画法公布から40年が経過した今も市街化区域内には多くの農地が残されています。播磨地域(東播・中播・西播の線引き都市計画区域)では、市街化区域の約10%が農地で、中には20%を超える市町もあります。さらに人口減少社会を迎える中で、将来にわたって相当量の農地が市街化区域に存在し続けることが推測されます。

これらが適切に営農・管理されるのであれば良いのですが、農地所有者側も安泰とは言えません。営農者の高齢化や後継者不足の問題は全国的に共通しており、さらに住宅地と農地の相隣問題、ごみやペット糞など営農環境の阻害、農地保有コストの上昇、相続による不在地主化など、営農を続けるのが難しくなっています。

結果として、スプロールの開発や耕作放棄地、管理が不十分な空き地などが増加し、営農環境が悪化するだけでなく、市街地環境上も問題を抱えることとなります。

<都市政策の方向性の変化>

こうした状況に対して、国の都市計画制度小委員会(H23年)では、都市農地について必然性のある非建築的土地利用として位置づけ、農業政策との再結合により、都市農業を持続的なものとしていくという方向性を示しています。また、兵庫県の都市計画区域マスタープラン(H22年)では、市街化区域

内農地を宅地化するものと都市緑地として保全するものに区分するという方針が位置づけられています。

このように、都市政策的には宅地化一辺倒から保全へと舵を切る時代的転換点にあることが分かります。しかし、具体の計画論は追いついておらず、市街化区域内農地は、都市計画からも農振計画からも「扱いにくいもの」とされているのが実情です。

<市街化区域内農地の保全に向けて>

兵庫県では、農地・農業の有する防災・環境・景観などの多面的機能を評価し、市街地環境の質の向上に資するものとして活用することを基本に、市街化区域のあり方の再構築を試みています。ここでは、主として都市計画・まちづくりの観点から、以下のような対応方向の必要性を提案しています。

- ①農地を含む市街地像の提示：農地の存在を前向きに捉えた市街地像を構築することで、都市環境に新たな可能性が開けることを示す。
- ②土地利用計画への位置づけ：都市計画マスタープランなどに「農地を保全する区域」を定めるため、新たな土地利用計画(ゾーニング)制度を構築する。
- ③地区レベルの計画づくり：農地所有者や地区住民の合意を形成し、地区レベルの土地利用計画、農地の保全活用計画を策定するため、新たな計画制度を構築する。
- ④土地利用規制手法と支援策の導入：実際に農地を保全するため、現行手法の改善を含む新たな土地利用規制手法の創設と、管理・営農のソフト支援及び簡易な基盤整備等のハード支援の方策を創設する。

<新たな都市計画の展望>

兵庫県播磨地域では、市街化区域内農地の保全・活用を図るため、市街化区域の概念を改め、土地利用計画制度を構築し、実現手法・支援施策を構築しようとしています。それらを通じて、農を生かした

豊かな生活が送れる新たな市街地像の形成を目指しています。この先には、三大都市圏の生産緑地地区制度に矮小化されていた都市農業を開放し、新たな都市計画を構築する可能性が展望されます。

おわりに

都市のコンパクト化に向けて、都市と農をどう関係づけるかが重要な論点になっています。今は集約拠点をいかに形成するかが議論の焦点になっていますが、表裏一体として、縮退する区域の土地利用を検討する必要があります。緑地や農地を有力候補に考えるならば、上記に示した都市農業の実情を踏まえ、農地を保全する土地利用政策と、業として維持する産業政策の連携と再構築を図る必要があります。

先に、都市と農の「近居」と「同居」の2つの事例を紹介しました。「スープの冷めない距離が最適」

などと言われますが、スープを持っていく関係が無ければ意味が無いのと同じで、都市と農のリアルな結びつき（互恵関係）をまちづくりの中でいかに創出するかが、豊かさを実感できる都市づくりにおいて重要だと考えます。



市民農園は都市と農をつなぐ仕掛けの一つ（播磨地域）



1日でまちづくりの新しいきっかけができた「さんだの夢・未来を描くワークショップ」

大阪事務所／小阪 昌裕

三田市（兵庫県）の総合計画づくりのための市民ワークショップを、草津市（滋賀県：本紙153号参照）を参考に3月5日、6日の土日の2日間（1日目がワークショップ、2日目が発表等）で企画、実施しました。

公募の方法は無作為抽出の3,000人（16歳以上）に発送し、その結果、定員60人のところに137人の応募があり、抽選で80

人を選びました。応募条件は2日両日参加できる高校生以上の市民です。

進め方

班構成は、まちづくり憲章の5本柱により、2班ずつ、計10班で構成しました。応募時に第3希望まで記入して頂き班分けしました。各班は市民7人、市職員1人、コンサルタント1人の構成です。

アルパックの役割は、ワークショップの企画、当日の全体の進行役、各班のファシリテーター、提言票のまとめ記入です。

話し合いに先立って、ワークショップの進め方等について説明があった後、市からこれまでの三田市のまちづくりについて紹介等を行いました。

その後、各班で、各テーマにおける三田の良い点と良くない

点について話し合いました。

昼食には、三田の食材を使ったお弁当とお茶を楽しみました。

午後からは、各テーマにおける目標（未来像）とそれを実現する手段について話し合いました。1日目の夕方には、翌日の発表の班の順番決め、各班の打合せが済んだ班より、自由解散となりました。

個性的発表

2日目午後の発表には、全員といって良いほどの出席者で、各班5分の時間制限のなかで発表がはじまりました。



三田の食材を使ったお弁当

班の全員が前に並んで、1人の発表から全員での発表まで各班の個性が出て、適宜休憩時間を挟みながら予定通りに進みました。

全部の班の発表後の休憩時に、各参加者と職員によるお気に入りの発表班へシールを貼る投票も行いました。発表時には市長にも出席願ひ、各班間の意見交換の後、市長との意見交換も行いました。

試行的ワークショップ

今回のワークショップの特徴は、まず、市民提案として決定し行政が実行することが条件となる「計画細胞（プランクス・ツエレ）」から発展した潜在的な市民がまちづくりに参画するきっかけづくりに期待する「市民討議会」の実験です。次に無作為抽出からの参加応募、朝から夕方までの1日でのワークショップをはじめ、班をまちづくり憲章の構成に一致させたことです。

立場別の感想

参加者は、三田のまちづくりに興味があって、友達と応募した高校生や、転入者で三田の歴史に興味のある定年退職者、子育て中の女性の参加もありました。当日の感想は、他の世代と意見交換ができた、機会があればまた参加したい等の前向きな感想が多かったこ



ワークショップの様子

とが印象的でした。

市担当課の感想は、当日の出席者も多く、終始なごやかにかつ積極的な意見交換の雰囲気の結果的にも参加意欲のあるワークショップとなったということです。

企画者としては人数が集まるかどうか、若い人が参加してくれるか、1日で短くないか逆に疲れないか、すぐにうち解けてもらえるか等、諸々の心配事がありましたが、最も気にしていたのが趣旨が理解してもらえるかどうかでした。

結果は、「無作為抽出によりこだわりのない市民参加ができた」、「1日間でも一定の成果が見えた」、「若者や現役市民等の多世代間等の多様な人が参加し、円満に進んだ」等のメリットが見いだせました。

今後の期待

今後、アイデアとして基本計画等に生かしていくことと、これを機会に今まで参加が難しかった市民層を含めてまちづくりへの意識が高まっていくことを期待しています。10人のファシリテーターで1日のワークショップの実施等初めての試みでしたが、予想以上の結果で、個々の経験を生かして、市民参加にさらに取り組んで行きたいと思っています。



お気に入りの発表班へシールを貼る投票

事業所のごみ排出実態を調査しました

大阪事務所／武藤 健司

昨年11月から12月にかけて、大阪市内事業所のごみ排出実態を調査しました。

調査は、約500事業所を対象としてごみ（事業系一般廃棄物）をサンプリングし、業種別に組成分析を行いました。

調査では、調査対象事業所の下見や調査ごみのサンプリングのため、40日間ほど夜間に大阪市内全域を駆け回りました。事業所のごみ排出状況、分別・資源化状況等について紹介します。

排出状況

事業所から出るごみの多くは、1日の事業活動が終わった夜に排出され、明け方までに回収されます。

ごみは事業所の前や目立たない裏口、道路脇などのスペースに排出され、袋やダンボール箱に入れられ排出される場合もあれば、ポリバケツやコンテナに入れられ排出される場合もあります。大きな事業所などでは、鍵付きのごみ庫に排出されるなど、排出方法は事業所により様々です。

分別・資源化の状況

日が変わる頃には、まちの至るところでパッカー車が見られごみが収集されます。収集は多くが1～2名体制で行われており、1名で収集している許可業者（一般廃棄物収集運搬業許可業者）も



きんきょう

多く見られました。

また、事業所によっては、資源化が可能なダンボールやびん・缶は分別して排出されます。分別された資源化物は、少量であれば、パッカー車の屋根付近等に設置されているコンテナ等で保管、収集されますが、資源化物が大量に排出される場合や許可業者によっては、資源化物のみを回収する車により収集されていました。

しかし、資源化物が分別されずに排出されている事業所、資源化物はある程度まとまって排出されているが資源化物として収集されていない場合も多くありました。また、資源化物が少量のため分別せず排出された場合も多くありました。

組成分析結果からみても、ダ

ンボールや新聞などの古紙類、缶などの資源化物が多く含まれており、資源化の促進、ごみ減量の可能性はまだまだありそうです。

ipad を使った調査方法

今回の調査方法で特徴的なことは、現地をまわる際に住宅地図を使用せず、調査対象事業所の位置やデータをipadに登録・マップ化して実施したことです。

はじめて行く地域でもGPS機能により迷わず、確認した事業所のごみ排出状況等のデータをその場で入力し管理しました。サンプリングの実施にあたり事業所や許可業者との調整が大変でしたが、ipadで管理することで効率よく調査できました。

今回、深夜に大阪市内全域を移



組成分析調査の様子

動したことで、昼間とは違うひっそりとしたビジネス街や工場地域、明け方まで活気にあふれていた繁華街や卸売市場の様子など、夜のまちの状況や人の動きを知ることができました。また、調査を続けるうちに、事業所の業種や規模をみると、どこにどのくらいのごみが排出されるかが少しずつ分かるようになりました。この感覚を忘れず、今後もごみ減量等について検討していきたいと思います。



ipad の写真

新・人 紹・介



分野の壁に水平ドロップキック

大阪事務所／山崎 衛

今年度、新しく入社させていただきました、山崎衛です。大阪事務所第2計画部に配属されました。

大学では環境工学を、大学院修士課程では環境マネジメントを学びました。大学院では、アルバックのように多様な分野の人が集まっていました。私はテーマを廃棄物・資源エネルギー・地域づくり・多分野融合とし、一般廃棄物収集運搬計画、石油製品の効率的利用のための指標づくり、環境啓発施設でのインターン研修、中山間地域での生活実態調査、多分野プラットフォームの運営などに取

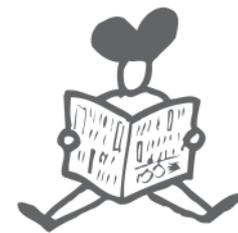
り組んでおりました。色々なことに興味があり、また色々なことが混ぜ合わさることの大事さを、実感しています。分野の壁には水平ドロップキックをぶちかまします！

まだまだ未熟ですが、皆様のご指導を有難く頂戴し、すくすくと成長する所存であります。よろしくお祈りします。

趣味は、音楽鑑賞、サイクリング、美味しいもん、美味しいコーヒーです。



「現場発！
産学官民連携の地域力」
関西ネットワークシステム編
発行：学芸出版社



紹介者／大阪事務所 中塚 一

「産学官民連携」言うは易し、行うは難し

近年の様々な分野のマスタープランやアクションプランにおいて、最終章「今後の進め方」で書かれている「産学官（民）連携で進めていきます」という文章とネットワーク（しているような）概念図。しかし、現実には、それぞれの組織における「誰」が他の組織の「誰」とつながり、相互の信頼関係の中で、具体的な活動や事業を行っていくのか。その関係性が無いと次の展開が見えてこないと感じている方が多いのではないのでしょうか。

KNS という異分野「コミュニティ」

本書は、過去 10 数年間にわたり、関西を中心に活動する産学官民の有志メンバーが、お互いにフラットな関係を築き、自主的にかつ積極的に交流・協働していく人的ネットワークに支えられた異分野コミュニティである関西ネットワークシステム（KNS）のメンバー 22 名により、正に、「何を思考し」「誰とどの様につながり」「何をしたのか（しようとしているのか）」という、それぞれの現場で日々奮闘する様子を、自ら書き記した力作です。

それぞれの熱い活動内容については、実際に本書を手にとって頂き、熟読していただくとして、本稿では、何故このような異分野「コミュニティ」が誕生したのかを、本書より紹介させて頂きます。

「コミュニティの場」という概念

KNS では、約 276 人（2010 年 12 月末）のメンバーが、年間 60～70 日に及ぶ総会や 7 つの研究會などの様々な活動が展開されています。K（必ず）、N（飲んで）、S（騒ぐ）という KNS の活動（私もその魅力に取りつかれた一人ですが）には、「参加する人同士が、所属や肩書き、年齢、性別、国・地方など背中に背負った看板

を脱ぎ捨てて、ひとりの自立した個人として関係性を創る」という大きな理念のもと、「地域産業や科学技術の振興、まちづくりの実践に取り組み、ひいては地域経済の活性化に貢献すること」をめざすという、関西の創造的な元気の源が溢れています。（詳しくは、本書と <http://www.kns.gr.jp/> を参照下さい）

このような創造的な関係性を生み出す「場」を「産学官民コミュニティ」と表現し、「目的を持つ人びとが、自由意志で加入・離脱し、ある目的のために意識的に結合し形成する人為的集団である『アソシエーション』に近い」概念として捉えられています。

「フラットな関係性」

KNS を形づくる上で、決定的で重要なキーワードとして「フラットな関係性」が挙げられています。「気さくな雰囲気、ヒエラルキーの垣根が低い関係性、どっぷり議論する場」、そのような「場」をつくる上で、「〇〇会議や△△協議会の名称にあるように、『連携という名の形式的会議』ではない「フラットな関係性」を、関係者の熱い想いと熟議による深い時間を踏まえ、どのように構築していったのが熱く語られています。

正に、近年、様々な地域のまちづくり活動において展開されている「ラウンドテーブル（井戸端会議など）」と同じ理念にもとづく「場」づくりです。

最後になりましたが、KNS は、岩手大学を中心に 20 年近く活動を展開している INS（岩手ネットワークシステム）に魅せられたメンバーがつながり、関西風アレンジされてスタートされたと聞いています。今回の東日本大震災に対しても、「足もとの小さなイノベーションが地域を変える」ように、KNS が、関西での様々な小さな活動が東北に元気を送りつづけるネットワークとなることを期待しております。



「ぶらり萩あるき」しませんか？

京都事務所／江藤 慎介

京都から山陰本線・普通列車に揺られて約15時間。桜と椿、そして夏みかんの色鮮やかな「維新の里」、萩城下町を訪れました。

「まちじゅうが博物館」を体感するまち・萩

夜に萩へ到着して驚いたことは、明かりも音もまったくなく、まさに「闇」。日本で初めて重伝建地区に選定された萩城下町やその周辺には、町並みを維持するためにコンビニもありません。

翌日、萩のまちなかを歩きました。武家屋敷が並ぶ白いなまこ壁や黒板塀、石州瓦の屋根並、土塀と夏みかんの風景、また格子や虫籠窓の町家が連なる港町など、萩では多彩な町並みに出会います。それぞれの町並みでは、地元の方から丁寧な説明を伺ったり、夏みかんを戴いたり・・・。

萩の魅力や萩にすむ人々が再発見するとともに、かけがえのない「萩のおたから」を守り育てながら、誇りをもって次世代に伝えていこうとする「萩まちじゅう博物館」の取り組みが表れていることを実感しました。

市民や観光客が集い楽しむまち・萩

中央公園の目の前にある萩図書館「萩あいぶらり」は、図書館だけでなく児童館やカフェを併設しており、子どもから大人までがゆったりとした時間を過ごしています。また萩市民館には「萩元気食堂」が併設され、萩産の野菜を中心とした地産地消メニューの野菜バイキングが食べられます。付近には山口県立萩美術館・浦上記念館や萩市庁舎、幕末にお



土壁と夏みかんの風景

ける長州藩の活躍に大きく貢献した藩校「明倫館」もあり、市民や観光客が学んで遊んでお腹いっぱいになる施設が集まっています。

イノベーションのヒントがあるまち・萩

萩まち歩きの手引きは松陰神社。敷地内にある松下村塾は、なんと僅か8畳の質素な家屋。久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋といった明治維新で活躍する人物を多数輩出した松下村塾は、まさにイノベーションを生み出す場と言えるでしょう。場づくりとはまず「ひと」が中心にあるとあらためて感じました。吉田松陰や門下生を支えたであろう、歴史からは見えない支援者の姿を思い浮かべながら、温泉で疲れを癒すのでした。



僅か8畳の松下村塾



萩元気食堂の野菜バイキング

アルパック(株)地域計画建築研究所

Architects Regional Planners & Associates・Kyoto

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四條通り高倉西入立売西町 82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F

TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F

TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760

東京事務所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-5-11 スクエア九段ビル 1F

TEL(03)3288-0240 FAX(03)3288-0221

九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128